潤いを失った日本を潤す農業・農協

南アルプス市農業協同組合 代表理事組合長　小池通義

自然を食い尽くして栄えた20世紀、今や子供から大人まで多くの人間が精神的にも肉体的にも退化し、弱くなっています。倫理観が薄れた社会では耳を背むけたくなる、戦慄を覚えるニュースが絶えません。私たちは、もっと便利に、もっと経済を豊かにしようと科学を発展させようと追い続ける時代は終わりにしなくてはなりません。人間の欲望を満足させるのではなく、これからの開発は「発展と調和」を基調に心の開発「心田」をせっせと耕し、人間本来の魂の安らぎを取り戻す時ではないでしょうか。子子孫孫に引き継ぐ社会を如何に築いていくか、それには農山村(地方)をどういう形で活性化していくかが大きなテーマではないかと思います。国があって地方があるのではなく、日本の生い立ちは農耕民族ですから農民の苦労の跡から滲み出る汗の結晶と協同の精神のもと、農山村が形作られ、その集合体として国造りへと向かっていった事を忘れてはなりません。

今、私達は20世紀の反省を踏まえて土への回帰をキーワードにしていく必要があります。そこには自然があり、食を生み出し農作業などを通じて編み出してきた伝統文化、コミュニティーもまだ存在する地方の資源をもう一度見直して再生する手当は何か、それは最後に残された日本の強みともいえる農山村(地方)をしっかり再生することによってのみ可能となると思います。人間は生きていく前提として衣食住を必要なときには、いつでも手に入れなければなりません。その内で最も大事な命を繋ぐ食の分野によって生計を支えているのが農業者であります。その農業・農家が競争の原理でなく相互扶助の精神を以て組織したのがJAであります。

その歴史を紐解くと、農民の苦労をいつも支え地域コミュニティーを築いてきたJAの姿が見えます。明治６年の「地租改正」により年貢(物納)から貨幣で納める税制に変わり重税に苦しむ農民の実情を憂い、農民の没落を防ぎ、国そのものが危なくなるのを防ぐため明治33年に「産業組合」が生まれ、昭和５年の昭和恐慌を経て、産業組合は農村地域に大きな力を発揮しました。戦時体制に入り「農業会」に改組され、国家統制の代行機関となり、敗戦により「農業会」も解散させられ、戦後の民主化の中で「農地改革」により農民は自作農となることが出来ました。この農地改革の成果を守る農民の経済組織としての役割を担ったのがJAであります。それから今日までJAは総合事業を通じて農業分野のみならず地方においては都市並みの生活インフラ、サービスを提供し農業・農村・地方の発展に広く貢献し、今もその進行形にあります。JAは過去から未来にかけて地方創生の一翼を担いながら、農業者の生活を守り、地域社会活性化への貢献を目指しています。食料と農村を置き忘れた農業所得増大だけの政府のスタンスには同意できません。

結びに私たちが考える農家・JAの仕事の定義について改めて考えてみたいと思います。「仕事」は事に仕えると書きますが、仕えるという事は偉大な存在の方に従い奉仕する事です。農家の受け持つ農作業という「仕事」は「農作物」に仕えるという事になります。JAの「仕事」は雇用主である農家(組合員)に仕えるという事になります。言い換えれば農家は仕事の対象となる作物を、JAの役職員は組合員(農家)を尊び、敬い、感謝の念を以て与えられた仕事(役割)に、一生懸命取組む事によって農業者は使命感や誇りを以て世にはばかって生活をエンジョイして頂きたい。又JAは雇用主であります組合員・地域からなくてはならない立ち位置を掴むことが出来るのではないでしょうか。

「桃李もの言わざれども下自ら蹊を成す」そんなJAを目標に雅日本(まほろば にほん)の一翼を担わせて頂くよう一意専心邁進してまいりたいと思います。

(こいけ　みちよし)

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/